三国七高僧御代記圖繪 上

特36
887

017933-001-4

特36-887

三国七高僧伝図会

不二 良洞／編

上

M26. 2

ABF-0929

版權所有

不二良洞編輯

石里必閱

三國七高僧傳代記卷弐

京都書肆　澤田文榮堂藏

念佛三昧能種種

煩惱及除先世罪

文榮堂藏

特36
887

文殊堂藏

龍樹菩薩
龍樹大士

三國七高僧傳圖會　卷之上　目録

一　龍樹菩薩傳
二　天親菩薩傳
三　曇鸞大師傳
四　道綽禪師傳
五　善導大師傳

三國七高僧傳圖會　卷之下　目録

六　源信僧都傳
七　源空上人傳　畢

三國七高僧傳圖會卷之上

一　龍樹菩薩之傳

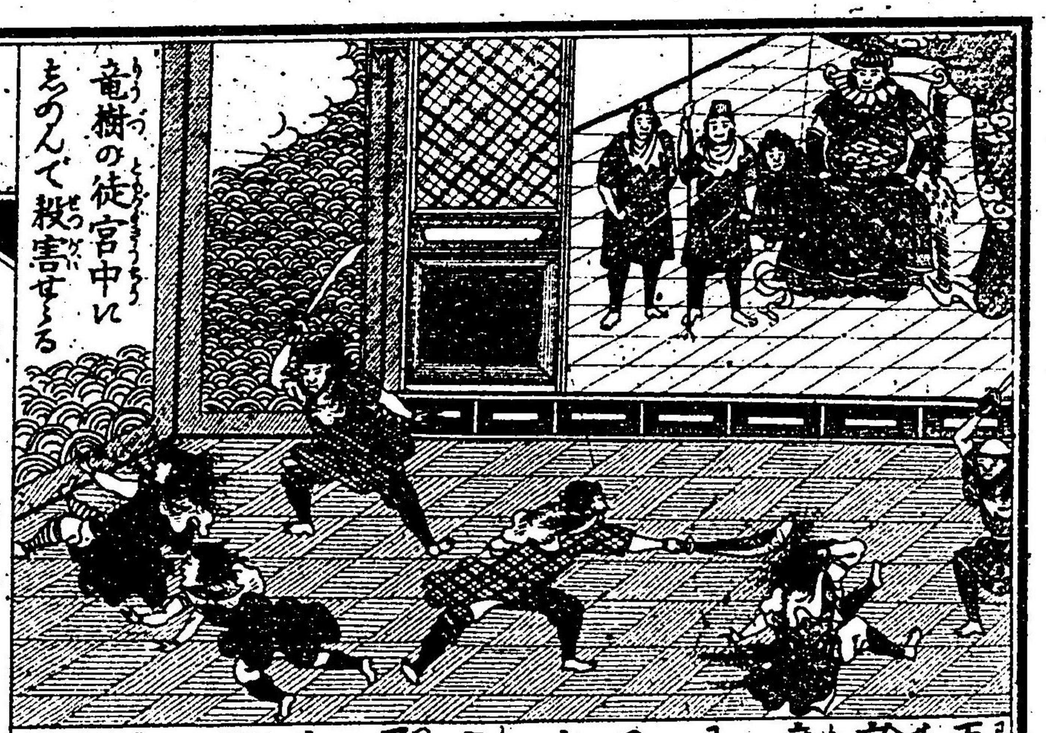
抑龍樹菩薩の出現に諸傳異説まちゝなれども法苑珠林六十六巻に玄奘三藏の傳に佛滅後三百年に出世まゝ七百年の長生を保たまうとあり然れ共一生の化導七百年あんぬ此菩薩は諸宗の高祖にして天台真言禪宗華嚴三論法相浄土真宗等に至るまで皆祖師に立まる其來由は釈迦如來楞伽山にまゝて未來記を大慧菩薩に説まふ經云く未来當有人大慧汝諦聽有人持我法於南大國中有大德苾名龍樹菩薩能破有無見為人説我衆大衆無上法證得歡喜地往生安樂國と然は如來滅後の後七百の星霜を經て出世まゝ龍樹菩薩と名けたまふ能外道の法を摧き有無の邪見を破まゝ大衆无上の法を明まふ其中に十住毘婆娑論を作りて難行易行の二道を明まゝ弥陀本願の法は唯

他力にて易行道あることを教へ又自ら弥陀十二礼の偈を作りて四施衆生生彼國と浄土往生を懇に人をも勧め自も願ひ求ぶ此菩薩の發心出家の由縁を尋ぬるに天竺月支國といふ西城中の南國あり其國東天竺西天竺南天竺北天竺中天竺と五に分てりその南天竺憍薩羅國ある梵士門の種大豪貴の家に生まれ名を龍樹と称す其母樹下に於て平産あすゆへ阿周陁那と字す阿周陁那へ樹の名なり龍その道を成するゆへ龍をもつて字に配し号して龍樹と曰或い龍宮に入りてめて成道を得るによつて龍樹と号すと統經見へたり又龍勝と号すと云へり天聰奇悟事不再告と有て天聰て万事を悟り聰命叡智ふして一を聞て十を知り其義理を明らめ未だ乳を乾食を舗るの中より諸梵士の四圍陀典を書籍暗誦し遂一心に領し尋常の人に勝り誠ふ安養久住の菩薩大慈大悲の方便なる思て知べし二十歳の頃にいたりて五天竺を巡歴し天文地理易學諸の道術等残なく學得て天竺廣しと雖

竜樹朋友と談ひて隠形の術を学ふ

誰か是を續ものあらんや然るに天竺大國なる故龍樹は彷徨る朋友三人あり是頗る豪傑なり一時に契友會合し相談て曰く凡そ天下の義理ふ於て神明を開き深旨を悟る者残ふべ吾等是を尽せり此上い何を以て自ふ娯とせん身ふ歓楽を究るの外ふし夫人情を慾し色欲を究るそ一生の楽なるん吾々梵士の徒ふして其を得ずと一國の王公にあらざれば思の侭ふ婬楽栄花を究るのかと

所詮身を隠すの術を學びて王宮へ自在にちのび入婬楽を極むべしとて夫より竜樹をはじめ三人同伴し其術師の家ふ至り其術を學んずるを乞ふに彼術師つゝゝ意るに此等四人ハ今天下にあらて双びなき輩にして名を世ハ裏々世の人を塵芥の如くふ思ひ吾ホの家に来る者にはゝゝ然ども我隠形の術をもゝゝ依て斯来るものあり今速に此法を授あ必ず我を棄て再來ると雖も先其藥のこと与へて法を傳ふるず待べし藥り尽ときハ必ず來るべしかるの時ハ長く我を師とし尊敬すべしと心を決し青色の丸藥を各一粒づゝ與へて曰く足下等此丸藥を密に眼にぬる時ハいつ紅人中に出るとも姿の見るるあしを教へけるに大ふ悦び藥をもちゝ入ん王城ふちのび入んるを議するに茲ふ竜樹ハ其丸藥の香氣を嗅考へて數七十種にして何々を以て調合すと悉く鑒察し彼術師の許ふ至りて此由を語る術師大に驚き僅に二種の藥こりとも其味分量まで飲今者有へゝゝ斯の如き人ハ之を聞も猶難



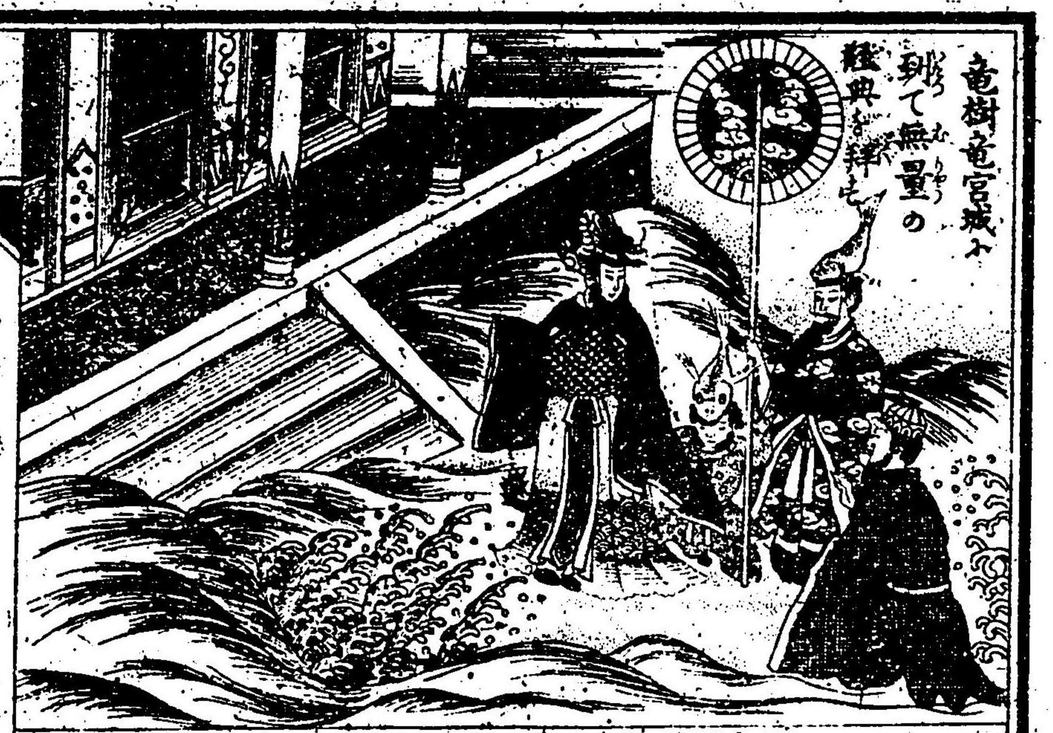
竜樹の徒宮中にものんで殺害せる

吾賤しき術ふんそ惜ふ足んたとへ隠とも詮あきるず其藥法万端具に授しよ竜樹已に隠身の術を傳へ三人の朋友も授け夫より王城に至り原より姿見へぎるべ誰ありて咎むる者あ心ふまるせ后宮女の房々に至り美人を侵し色欲を婪し然るに百余日の後女官局ふおいて懐妊の人影しく如何ある訳といふすをちゝ面々愧あそると雖も匿みゝあく斯怪しきる何者の仕業あるそと種々穿議ありるふ一人の老臣曰く斯の如き奇怪ふ二種あり一

鬼魅魍魎狐狸の類ひの所為なり亦一に方術と云て身を隠の術を以て忍
入るなり是を調るには諸門の中にこれある砂を布き嚴〳〵監人を以て守ら
しめ玉ひ鬼魅の類あらハ其足跡有べし隠身狐狸の業あらハ必す足
跡と現るべし若鬼魅等の業あるべ術を以て是を滅すべし若人間の所
為ありせハ兵士を以て是を退治すべしと其準備構〳〵案にたがはす四人
の足跡庭上白砂にのこされ曲者ごとんありと騨をもつて諸門を堅め玉ふ
勇臣宮中に入劔を揮て縱横無尽に隅々空を切て廻まハ何ハ以てなる
るき透間のふせず伐立ふき即時に三人ハ切殺きまき忽ち形を显し
なり其時竜樹も危めりしを素より智恵勝れし故帝王の側ハ寄そひ
身を縮め氣をかくしなるる帝のおとり七尺四方劔を揮ふる能はず是に
依て劔難を免き辛き命を助りなる是時初めて徳を破り身を危すこ
とこハ此より起る有べきなるにはなんと悟りむひ一心ハ誓を立て曰く我を〳〵

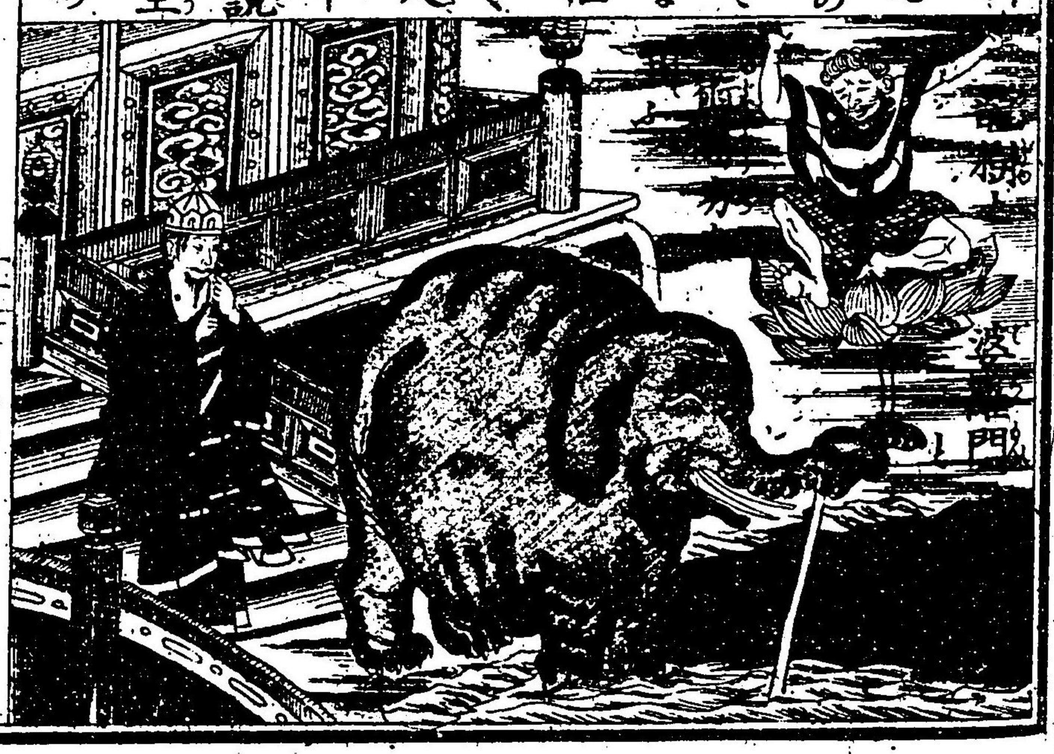
今日の厄難を免るるを得ハ出家
とあり佛法を修すべしと決定し是
を經にハ即自誓曰我若得脱當詣
沙門受出家法と説るなり夫より
山中に入り一個の佛塔に詣で出家
授戒し三藏經律論を誦尽しなる大小
乘の深義を究め尚其余の經なん
と十方を索もるなども得るなし
なりて雪山に登り山中に塔なり中に老
比丘なり謁へて法を尋ねたふ摩
訶衍經典大乘經卷をもつて是を与ふ龍
樹さづかりて已に誦し其実義を

知と〻とも未だ通利を得ざれば故に閻浮提世界中を普く求めつゝ虫
ども学べき経なし故ふ邪慢の心を起し〻ふ〻〻思ふ世界中法其か
す甚多し原より佛経妙也と以ども利以之を推ときは故いまゝ尽きる所あ
り其尽きる所を我これを推て以て後学の者を悟すべしと理ふたがはれた
事にあらで失あり何の外ひらんやと心を決し新に法を立て佛法に准ひ聊
異なる有るべき是に先師なる者を見立ることを置諸弟子に新なる戒を
授け新なる衣を着さしめ受戒せしめ我は静なる清浄の水精房の中ふ
在せり其時菩薩位ふ住ぜゝ龍大龍神出現し此形勢を見て数惜み
これを憐み即時に龍樹を伴ひ海中に入竜宮城ふいたり宮殿中の七宝
の蔵をひらき七宝の函を取りて方等経典無量の妙法を以て之を授
く竜樹之を受て讀誦す其数多し尤経説の深をきとり実利を會得し
ゐわと虫ども佛法の有がたき実を領解しゐんす其時竜神ときてを



察して問て曰く足下の看所の経巻遍きやいあや竜樹答て云く諸函中
の経巻多く無量あり今讀ところの経巳ふ閻浮提ふ十倍せり竜樹の曰
く今見ゐふ経のごときは此宮中の諸處ふ蔵せり是其員を数ふべうふ〻
則之を見せまつらせんと无量の経蔵を冗き見せむ竜樹是迄見所の経ふ
百千万倍せりとゝ〻感嘆し實に佛経の廣大ありて言語に絶せり
と其時已に諸宗の一相を得て深く
無生を悟り二忍具足すと竜神い

竜樹ハ仏道を得るゆゑより竜宮城を伴ひ出て閻浮提ゆ送りかへるる時ハ南天竺の王諸國を順覽しるゆに邪道を信用の沙門釋子一個も見ゆる事を得す國人皆其王道に化す竜樹つくゝ思ひるゆ樹ハ其本を伐ざるゆ傾ケ人主化せさるゆ則道行まゝと然るゆ其國の政法王家錢をいゝて人を雇ひ行列の人夫と成り竜樹幸に此便をりつて人夫の將とあり前駈ハ列すり其行列の倍を整へ次弟を正してさしづするゆ嚴かにして令行れ衆卒隨ふゆ奇あり國王大に歡び是ハ如何ゆる從臣ぞと問ふ從臣荅て此者の催促ゆ應じ勤る処あり先も扶持を食せゝ又錢をとゝ〻かく恭しく勤ること斯のごとし王近く召て汝是何人ゆるや竜樹吾ハ是一切智人と然まゝ天令何をゆ為や竜樹の曰く天令阿修羅と戦ふ然まゝ何以証とするや驗ゆるゝと言訖る時忽ち空中より千戈兵器地ゆ落ち又阿修羅の耳鼻手足指ゆ空に從て下る王及ひ臣民婆羅門衆をして空中に天と阿修羅と両陣相對するを見すゝ王乃ち竜樹を敬ひ其法化ゆ伏す万の婆羅門あり〻ゆ各髪を切成就戒を受て弟子とあゆり此時竜樹南天竺ゆ於て大ひに仏法を弘む外道有無の邪見を摧破し廣く摩訶行大を明ゆす斯て竜樹ハ憂婆提舎十万偈を作り又菩薩嚴仏道論五千偈乃至無畏論十万偈を作る偖て才万二十万の偈を説て普く仏法を弘めゆゝ殊更國王既依しゝゆゝ國中の人民風の草の



あびらうごとく佛法盛んゝ行まけるにしたがひ一人婆羅門あり能呪術を得て種々の奇瑞を驗せり竜樹を大ふ妬み其弘むる所の法術きらひ勝敗を試んとて國王に願ひ睿慮ありて竜樹と共に政德殿ふ出御ありて侍ふふ婆羅門来り殿前に於て口ふ呪文を唱ふれハ忽ち大ある池を現し清浄の水涌上りその中に千葉の蓮花を生ず其蓮花ふ打乗て大音を挙げて曰く竜樹世ふ誇ると雖も汝ハ池上にありて畜生に異ならず我ハ蓮花の上に座しくりさまゝ論義をあさんと抗言す尓時竜樹ハ些しも騒ぐ暫く呪術を行ひ給ハ忽ち六牙の白象あらわれ池の中に入て婆羅門の廣大ある蓮の軸を鼻にてゝるゝと溢き引ぬき虚空に投上まハどうと落々まきハ婆羅門ハ腰骨打くだき礼大に苦しく竜樹に敬礼して弟子ふ加へ玉り終に竜樹ハ此世を退き閑室に入り扉を立在り弟子の人々奇異に思ひ日を経戸を開き見まゝハ在まゝ行方ふまゝ故ふ廟堂を立敬奉るゝ佛の如く龍樹大士と称す

天親菩薩

(二)天親菩薩傳

天親菩薩は北天竺富婆沙富羅國の人なり父は此土の國師婆羅門なり姓は憍尸迦と云三個の子なり三人ともに婆藪槃豆と名く天竺の風として兒の名を立るるに同く一名を以て又別名を立て天親は釈迦如來滅後九百年に北天竺丈夫國（富婆沙富羅國）に生玉ふ御壽命は八十年天竺國刹初の時毘捜紐天王（帝釈天此土の呼名）より來下して開闢したまふ其德を感じ天王の像を丈二丈に造廟を立ていとなみ婆藪槃豆と称す諸人歩を運び此天に祈るに諸願成就せずと云なし然るに天親の父母子なきを愁ひ祈誓をかけるに忽ち一子を給ふさきに婆藪槃豆なり授りるの小児なり婆藪槃豆と名く此天王は親の子を親しむに天親と号するなり此天像に祈願して得る兒なるに天親と名と以り斯て第三子の婆藪槃豆は薩婆多部に於て出家し阿羅漢の果を得る別に比鄰持跋婆と名く長子は菩薩の根性なるゆへに又薩婆多部に於

て出家せり後に定を修して南欲を得空義を思惟すれども入と能はず賓頭盧阿羅漢東毘提河に來て此るを観見し彼地より來て長子の為に小乘の空観を説是を観して即入るを得るに偖小乘の空観を得と以ども意尚いまだ安からず依て神通を乘して兜率天に昇りて彌勒菩薩に諸問す弥勒菩薩渠が為に大乘の空観を説ふ夫より長子の婆藪槃頭は閻浮提に下り弥勒の説ふを如く思惟して大乘の空観を得さり

此の因て名を師僧伽と云ふ此中無着と云小乗を厭ひ捨てる義あり其れ後ち〳〵兜率天に昇り弥勒に大乗経の義を諮問して閻浮提に於て余人の為に聞処を説ゐへども聞者多く信を生ずるもの〻〻此上へ弥勒尊直に閻浮提に下りゐひ解脱しめんや如ずして顛ひゐへ〻閻浮提に下り大光明を放て廣く有縁の衆を集め諸法堂に十七地論（瑜伽論百巻）を誦出しゐよ同一堂に於て聽聞すと〻へども其義を解せず因て阿僧伽へ弥勒の説ところを解釈す此ゐ因て衆人皆大乗を信ず弥勒尊阿僧伽の為に其大乗経の義を委しく解釈しゐふ阿僧伽一々通達しゐ後大乗経優婆提舎を作り仏の説ゐふ所の一切大乗経を解釈しゐ〻り然まゐ上ふ方のすゐ如く第三子乃別名を比鄰持跋婆と云ひ第一長子を阿僧伽と云ひ第二子を天親菩薩にして亦薩婆多部に於て出家しゐふ博學多聞ゐして遍く墳籍ゐ通ず俊才類なき尤も戒行清高にして相匹ゲ〻〻〻効ふ仏滅後五百年

のち阿羅漢ゐり迦旃子と名く先ゐ薩婆多部に於て出家す本是天竺の人なり後ゐ罽賓國に往て五百の阿羅漢ゐよび菩薩と共ニ薩婆多部の阿毘達磨と云る小乗論を撰集す八伽蘭陀と云ふ五万偈なり廣く遠近に宣告するゆう若先ニ佛の阿毘達磨を説を聞ふ得処の多少ゐ〻ひて送來るべしと鯛けり日ゐにより人天諸竜夜叉諸天先ゐ佛の阿毘達磨を説を聞ゐり或器或廣く一偈一句を悉く送与

ふ迦旃延子諸羅漢菩薩と共ふその義を簡擇すゑ〳〵修多羅毘那耶と相違背せきをバ即撰録す若違背すれハ棄捨に是取所の文句義類相関るに寸ごふ若惠義を明ふする時ハ惠結中に安置し若定義を明ふする時ハ定義中に安置す尚余類悉〳〵ふり已ふ八結を造り竟ぬ又毘沙門を造り此を釈せんと思ひ馬鳴菩薩を招請せんと使を舎衛国に遣し馬鳴而ふ應じて罽賓國に来臨しふふ迦旃延子寺次弟に八結を解釈す共に其義意定まれバ馬鳴まゝ〴〵つて即文を著ハれ已ふ十二年を経て毘婆沙を作り畢ぬ凡百万偈あり製述已ふ畢て迦旃延子即石ふ剣を制を立て今より後此法を学人八罽賓國の外へ出ることを得まれど是ハ此國にて辛苦を尽し八句の文ハよび毘婆沙の文句成就せり正法を他に廣く弘まる恐みて禁制を立抑此罰賓國ハ四方山めぐりて城のごとく唯一門ありて出入す夜叉神に此門を

守ふ〳〵む此法を學ばんと思ふ者ハ罽賓に來ることを咎めず茲に阿蹰闍國に一個の僧あり婆須跋陀羅と名く聰明大智にして聞ハ即能持つその天性類ひ稀あり此法師かの八結毘婆沙の義を余國に弘通せんと思ふより其身を俗の狂人と成て罽賓國に來り平生大市の中に交り說法聽聞〳〵さまゞ狂人の形勢ふやつ〳〵なまゞ言語も違ひて通例あ〳〵さまゞ市人是を狂人ごとその數に入ざりける則て十二年を経毘婆沙を聞こと數回あまゞその文義已ふ熟

心中に納めゝかゞ本國に歸らんとさゝを去て國堺の門に至り出んとする時
彼夜叉神即時ゝゝへて大集の中に歸す衆人共に檢問するに語紕繆ゝて
領解せゞ一同狂人ありとすゝを放遣又門を出んとす語神執てかゝす
る三四度終に國を出さゝむ法師い首尾よく本國に歸り遠近に觸令て
云く我已に罽賓國に至りて毘婆娑を學び文義具に學ぶんと思ふこゝろ
急ぎ來て之を取べゝと依て四方より學徒ゝるまり來り各ゝ學びゝるより
罽賓國の諸師後に此法の余國に傳りゝを後悔せゝそ其後多くの星霜
を經て仏滅後九百年中に至りて頻闍訶婆娑と云外道ゝり頻闍訶山と云
山に住す此麓に池ゝり中に竜王ゝて名を毘利娑伽那とゝゝり僧佉論を
解す依て頻闍訶婆娑之に就て受學せんとする其意を述るに竜王之
を許ゝ僧佉論の解を說頻闍訶此義を得て外道の法傳ゝり夫より
ゝて心高く大憍慢ゝり此法最大にして此に過ゝる法ゝるべゝと今

釈迦の法盛に世に行まゝ衆人ゝゝ
此法を尊めり我これを破すゝゝとて
即阿蹰闍國に入て論義せんと國王
に願ふ終に此事を許ゝ王ゝ國内の
諸法師誰ゝ此外道に對するゝの
ゝゝゝ与に論義すゝゝと命す時に
婆藪槃豆等の諸大法師ゝ悉く余
國に往て在ざれ唯婆藪槃豆の師
匠ゝる佛陀密多羅法師のみ此法師
本と大解ゝりとゝゝども年已に老衰
し神情昧弱ゝ弁說とくの事に見る
影もあざ行狀あきとも此と對論

頻闍訶婆娑論義の勝を得て佛陀密多羅老法師を打つ

するゑ勝劣分ちがゝてと雖外道次第に道理を以て是を破る法師老邁の故ゑ遂ゑ負に堕す故ゑ老法師の脊に鞭打て其成敗を行へり頻闍山ゑ皈り時ゑ此外道大願を発して山中の窟の中に入り呪術を以て夜又神女の稠林といゝるを招きゑ此神女に従て願ふゆう我死て後石と成て永く毀さゝしめんと神女即ちこゝを許諾ふさて衆ゑ告ていはく我著す処の僧法論に於て不審の條ゝらゞ其趣を石面に書べし我必文字を以て説べしと誓ひつゝ自ら石をもりつて窟を閉て命を捨るゑ身即ち石と成まり其後難問のことゝ行きべ石面ゑ書て尋ぬるゑ即坐ゑ文字をあらゝ返答す斯て天親ハ阿踰闍國ゑ皈り斯のことき事を聞其外道の我慢を折伏し以て師を辱め恥をすゝぐんと欲すきど石と成し由を聞玉ひ天親尚も憤りをまし即ち七十真實論を造りて外道の僧法論を破し玉ふ其論文を石に觸るゑ石面ゑ汗を流し終に微塵の如く碎けて一句も答ると

能ハず天親ハ師の高恩を報ひ打取雪ぎたまふと是偏ゑ高德のゝゝす所ゝと國王もゞめ衆生こふ天親の德を賞し國王三洛沙の金を賜ふ天親此金を三分ふとりて阿踰闍國ふ三寺を建立し一ゑハ比丘尼寺二ゑハ薩婆多部寺三ゑ大乘部寺等あり其後天親ハ正法成立して先ゑ毘婆婆を學び後ゑ毘婆婆の義を講す一日講ずるとき一偈を作りて一日説所の義を攝す赤銅の板ゑ刻て以て此偈を書て醉像の頭ふ標し置鼓をうつて曰く

誰人か能此偈の義を破せん若破する者あらバ當出来るべしと斯の如く六百余偈を造り具へ置き誰につて破する者あらば即是俱舎の偈なり後に五十斤の金と并に此偈を以て罽賓國の諸師に寄與す彼人々大に歓喜し我正法已に弘通せりといへり但し偈に畧して意味深々まこと解しがたし故に天親より贈り来りし五十斤の金に又五十斤を添へ都合百斤とし天親に贈偈に尽くし解しがたき事を註を加へ此偈の義を詳に解し王の事を乞天親是を承諾し若摏所にらバ經部の義を以て之を破す名て阿毘達磨俱舎論といふ論全く成り後に罽賓國の諸師に寄與す國王正勤日王より既依し太子婆羅秩底也新日王法師にあさんと王原より思ふ

ゆゑに天親に就て戒を受しめ王妃も出家して弟子となり太子後に王位に登り母公と同じく天親を阿蹰闍國に住して其供養を受ん事を乞ふ天親之を許す然るに新日王の妹の夫婆羅門を婆修羅多と名し是外道の法師に

毘伽論を造りて天親の俱舎論を破して云く天親の立る所の論と我毘伽論を解せずんば汝が論を破るべし

伽論と大に相違せり若我論を解すること能ずんバ汝が論を破るべし

天親の云く我若毘伽論を解せずんば深の妙義を解せ以てんやと仍て論を造り毘伽論を破す三十二品初より末まで悉く皆破る是に於て毘伽論つぶきて唯俱舎論のみ在り國王賞して三洛叉の金を天親に賜ふ天親ハ此金を分て三分とし大夫國罽賓國と阿蹰闍國とに各一寺を

兄阿僧伽弟天親に大衆を進む

建立し斯て天親ハ妙ゑ小乘を解す是を執て是とし大乘を信せぬ摩訶衍ハ此仏説にあらぬと思う茲ゑ又天親の兄なる阿僧伽ハ此弟の聰明人に過れ内外ゑ通ずるを以て其論を造り大乘を破せんるを恐る兄ハ丈夫國に在て使を阿踰闍國に遣し弟天親に告て曰く我今疾重く死期に臨む急に來るべしと弟驚き使と共に本國ゑ飯り對面し病の容すを尋ぬるゑ兄つゝ我今心ゑ重病ゆゑ其本ハ外より來るにあらぬ汝より發る所ゑ不審其故聞せまゝと兄曰く是別義にあらぬ汝小乘を信して大乘を信ぜぬ常に毀謗を生ぬその悪業に依て必ず悪道に沈んて无量の苦を受し恒ゑ此を愁ふ天親大に驚き兄の大乘の要義を懇ゑ聞き本より聰明あれバ兄の説ゑ所の如く悉く通達せぬと云と雖依て大乘論を造り諸の大乘經を解釈し華嚴涅槃法華般若維摩勝鬘ゑの大乘經論を悉く造り畢ぬ御年八十歳にして阿踰闍國ゑ於ひて迁化しゑとあり

三 曇鸞大師傳

曇鸞ハ其姓氏不詳ノ人ども震且山西大同府鴈門といへる所の人ありて其家五臺山に近き邊に住り未志學十五にあらざる内に五臺山に登り文殊の浄土なる霊場を尋ね其遺跡を拜して菩提心を発し即出家修行しまふ内典外典の經籍とゝのをハ殘らず通達し別して四論の仏性ハ心を砕きまハ一時大集經を読まふに其義深密にして容易ハ開悟しかゝきを恨み此經ハ註釈を加へ書を作りて衆を導んと其文言を著しまふ半を過るころ患ひて氣疾を発し筆を停めて医療を加へ尚を保養のゝちハ汾州山西秦陵の古墟ハ至り城の東門に入て上青霄望ミ忽ち天門の洞ハあるを見まひ依て病平愈し前ハ書さし註釈を作り継んと欲して熟思めぐらしまふ夫釈尊四十九年三百六十四會の説法甚以て廣多あり其上菩薩の論人師の釈誠ハ學ふべき經論釈多し

又此身の老少不常ハ世の習ひ經論を學び尽さんにハ短命にてハ及びがたし茲に長年の神仙あり江南とハ地ハ名を陶隱居と号す長命不死の妙術を得て海内普く崇敬す故にこれハ從ふて仙術を学むとて北魏の地を出て南朝の都に至り時の帝に拜謁し奉りゝ由を達せゝる此時の王ハ梁の武帝の大通年中あり所司等頓て奏聞す帝きゝ〻め〻重雲殿に引路すゝ此重雲殿と云ハ千迷道とて門の數廿余あり甚殊ゝ〻き間

取あり帝ハ殿中の隅に坐し袈裟を褻ひ納帽を被き曇鸞ハ宮殿の前に至りて後を顧るに引路の者きたれに見へず進こ見るに高座構へて上に机を飾りなるなりて外に座を設曇鸞座に昇り仏性の義を立ること三度帝仏性の深畧にして疑となりまべ〳〵問ひまべ〳〵答ふ問答に稍時うつり明日相見べしと曇鸞堅をとり徐々と出るに廿余の門一ケ処も誤りあ〳〵出るを帝歎覧なりて大に嘆詠して宜〳〵是凡人にあらず始て来りて更に迷支を頻に感心しまひつ明且ハ大極殿に迎へ其未ところを問ふ曇鸞答て云〳〵野僧仏法を学ばんと欲するに年齢の短を悲しむ遥々此國に来り陶隠居に従ひ仙術を求ん致すあり曇鸞ハ殿中を下り夫より彼仙所に至り其法術を学ばんことを乞ふ陶隠居ハ大に欣ひ便ち仙経十巻を授与す曇鸞ハ望の如くなり夫より本國へ皈り北魏の境に至り陶隠居ゲ教へ〳〵名山に入て修行し仙術を得んことと此所彼所と勝地をたづみ〳〵折うふ図ふに北天竺の乾

陀會國ある三蔵菩提留支に値り曇鸞の携なる仙経十巻を出し此是長生不死の仙経あり仏法の中に於て長生不死の法なりて仙術に勝るこの有やと問ふ此時留支三蔵長生不死の仙術を習ひ修して八苦充満の世界に久〳〵存ぐ色相輪廻の苦を受るもあり更に出離生死頓證菩提の仙経にあらば斯ある色相相続の仙経を至極の中に尊ん偖も浅ち知人多なり拙き詞を聞こと大地に唾を吐て懐より観無量寿経

を出して曰く是れ此西天の大仙演説の長生不死の法あり之に依て修行すべし命に限りあるべき死量仏とあるべし縱い仙術を学び長生の法を得るとも少時の間死せずして終に死して三有に輪廻するを吁愚かなる我教に當て生死を解脱するものを以て念仏の功徳を〻〻と語りあり子曇鸞實に領解して念仏往生の深き意を授かり直に陶隱居より授かる仙經十巻を焼すてそれより四論の講説を永く止念仏三昧の身となりて讃阿弥陀仏の偈を造り安養浄土の依正二報の功徳を是れ是迄種々に心を尽くして遥々江南に赴き懇望して仙方を流支の一言の示教に依て忽ち先非を悔て焼すて他力の大道に敢て一向専修の真門に入るべし宿善到来して曇鸞の改悔心一念発起の時節平生往生の是れと云べし時に魏の帝王曇鸞を崇めて神鸞と号け勅下并びに加の太嚴寺住せしめ尓後汾州北山石壁の玄忠寺に移住せし魏

の興和四年に卒して春秋六十有七臨終の日に至りて虚空より花降りて幡天蓋等寺の宇を覆ひ香氣四方に薫じ音楽の声えげく寺に登る衆人ここをを見聞する支の由を帝に奏聞す勅して汾西秦陵の文谷に葬つて霊廟を立並に石牌を建て師の高徳を録して今も尚存在すと云ふ而して曇鸞は神智高遠にして三國の人皆その徳を知る諸経巻に詳うある人外に獨歩す梁國の天子蕭王恒に北に向ひて曇鸞菩薩

と禮したまふ天親菩薩の淨土論を注解し裁て兩卷とす又無量壽經卷讃七言の偈百九十五行並ふ問荅一卷を撰集して世ふ流行せしめ道俗を勤めて決定往生諸仏を見奉ることを得せしめ常に竜樹菩薩に臨終の開悟を請ひまふ誠ふ所願の如く一夜聖僧の像を現じて忽ふ来りて菴室に入て云く我ハ是竜樹あり則ち説て曰く已に落る葉ハ枝に附へからず已に去るものハ還りかたし未来迫べうよ現在今何ぞ行んと法師妙ふ宣旨に達す是終を告るなりとまふ依て即ち夜中に白衣の弟子及び寺内出家の弟子に告ぐ今已に命終すべしと三百余人一時に雲の如く集る曇鸞手に香爐をとりて西に向て堅し門徒に教誡して西方の業を索む日の出る時大平声を齊しく弥陀仏を念す即ち壽終　たまふ時又音楽空中にひびきて東より西に向ふて去を聞大衆等相共に彼ふ至て師を訪ふ果して入滅ひしを見ると云云

道綽禪師

四　道綽禪師傳

抑道綽ハ釈尊滅後一千五百十一年唐の并州の晋陽汾水縣ふ生きまふ姓ハ衛氏弱齡ゝ紀俗間にいりて人を敬ひ悔ひ少長るふ其礼節を專ふふす人ゝふ是を称美せり十四歳ゝして出家し廣く諸教にはたり殊に大涅槃部を宗ゝして弘傳しまひ講するゝ廿四遍後ふ瓚禪師につく〳〵空理を修行しまふ瓚禪師大に嘆美してこれを愛すその名遠近に高く聖人ゝもゝ尊敬せり一時汝水石壁谷玄忠寺ふ登りまふ此仏刹ハ曇鸞大師御建立にして則文谷ふ鸞師の牌ゝり道綽ここに詣てもゝめて牌の銘をよこて大に慚謝しつゝ曇鸞と我とその智くらぶきび月と星との如く其德行をハ王と尾のごとし〳〵其曇鸞師すゝ尚四論の講説をきゝおて本願他力をたのみ仙經を焼すて深く浄土に皈しまふ況や我浅智をやと則ち牌前にひざまづきて回心して浄業に皈し仰願い

滅後の弟子と思しめされ哀愍覆護しまへと心願しゝ夫より是おで修学しまいし涅槃宗を捨て壇師の往生論注を指南ゝして此玄忠寺に在住し自行化他しまふ恒ふ観経を講ずるゝ二百遍人ゝふ手にハ珠數を操り口ふ佛号を唱ふ毎時退散のひぐき林谷にもぐきまり或ハ邪見にして信せぬ是を毀謗するもの一回道綽の相貌の柔和あるを見て氣をのおきぬ伏せ曾て貞観二年四月八日

以て命の尽んとするを知て此由を申しつぐ此を聞つゝ〻く來る者山寺にうつ此人々皆曇鸞大師七宝の船ゐ乗り道綽ゐ告て云汝浄業已に成て往生もべき堂成就す然ども余命未た尽すこのさるゐを見る并ゐ化仏空中にまゝして天華をちらすを見る又往生証據のためゐ乾る地に蓮華をさして試みゐゐ萎まること七日にあらんて尚鮮其余善相記すゐ遑なし道綽自ら常に木欒子を珠数として諸の四衆に与へて其称名念仏を教へもつゝ禎瑞を量し具に行図を叙る浄土論両巻を著し遠く竜樹天親の法門を談じ近く曇鸞恵遠の心をのべ大に浄土を尊崇し明に昌言を示すその化導を蒙むるこの年をかさねて益さらんあり道綽浄土を宗として坐するに常に西ゐ向ひ晨宵假ゐも西を後ゐせず六時篤行敬行もつぱら行を欠ゐず行住坐卧に念仏止をあぐ日々七万を以て限りとす扨

善導和尚といふは道綽の御弟子ゐして晋陽の九品道場ゐて観経を開演しゐゐ時初めて師弟の契約ゐり即ち観経を授与し及び浄土の法門を相兼しゐゐるに善導和尚は不待時の別祝ゐて忽ゐ三昧発得して出定入定了々分明ゐまゝ散心の眼前ゐも浄土の聖境を拝見しゐゐ況や入定の日は弥陀如来に対面しゐゐ道綽は師ありとへども未ざ三昧ゐ発得しゐゐば是故ゐ或時善導大師ゐ問たまはく我は決定して往生

を得んかと有しかば善導大師まのあたり一莖の蓮花を以て仏前の乾る池に挿して七日の間行道念仏せんに若蓮華萎み憔けずんば往生決定あらんとのたまへば道綽禅師頓て教に任せて斯のごとくしをへば七日の間果然として萎み憔けば次第に色鮮あり道綽大に歓喜し備わげ往生決定ありとて弥念仏しをへり或時善導に告て宣ふ願くば師定ふ入て道綽に決定して往生さべきや否やを阿弥陀仏に尋ねをへと有けまへば善導大師即ち定に入て観念し給ふに御丈十丈ばかりの阿弥陀仏現ぜるを観見しをへる是に依て問ふに道綽現に念仏三昧を修す決定して往生を得んや又何きの年月ころ往生することを得んと有けまへば阿弥陀仏の御答に樹を伐んふに頻ふ斧を下せ縁ふんに共語るところあらん家ふかくしんふに苦を辞することあらんと云へり念仏の功徳廣大なるを知りをへ

五　善導大師傳

善導大師は隋の陽帝の大業九年癸酉に生まれ唐の高宗の永隆二年に往生したまふと云へども唐朝に於て化益盛なる故に唐の善導和尚と号す姓は朱氏にして泗州の人なり幼くして密別の明勝法師に師事して出家し常に法華維摩の二経を誦したまふ明勝法師は三論宗にて法朗大師の門人の嘉祥大師と同室の李者なり一時西方浄土の変相曼荼羅を見て嘆じて曰く何にして質を蓮臺に託して神を浄土に捷しむべきと欣求浄土の心を発し給へり尓後具足戒を妙開律師に受るに及んで共に観経を見て悲喜交嘆したまふ是実に仏道に入の至要なり今まで可様の仏法に逢ざることを悲しこと今とふ今宿善到来して他力の法に逢ぬるすの嬉しさゆゑに大に喜ひあひ或時心に思惟して弥陀凡仏の教は隨喜得益にして

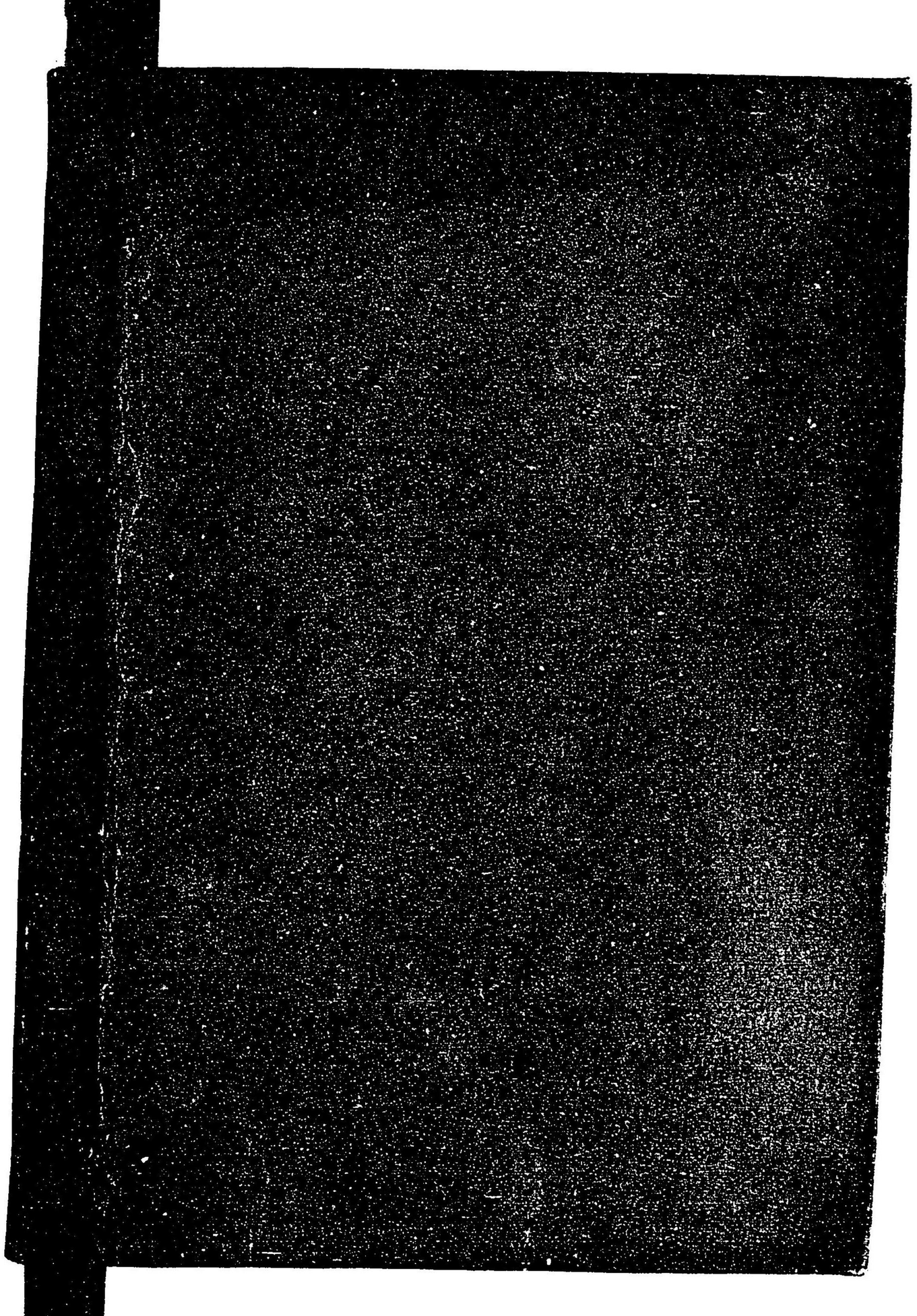
枳欲に隨て設る教なるべし若枳法相應せぬときは勞して功なし然るに吾に有縁の法を求めんと思ひ玉ひ則ち経蔵の中に入り我に有縁の法あらば授け玉へと眼をとぢ一心に手まさぐりて操り玉へば観経を得たり偖て有縁の経なりと大に喜ひ玉ひ讀誦して受持し玉ふ尓後道綽禅師の晋陽にて観経を演説したまふ聞て貞観十五年年廿九才に千里を遠しとせず道綽の所に行て志を遂げ玉ふ道綽すなはち観経を授け

玉ふ是観経ハ有縁の経ある上に今まこと道綽より相承し王へハ因縁の深厚なるをよろこび夫より観経ふるて三昧発得し定中に於て浄土の依正の荘厳を拝見し出定入定さらりあ〜と又唐の貞観中道綽禪師方等懺を行ひ及び浄土九品道場に観経を講ぜるを見て大ふよろこびて曰く誠ふ是佛道に近道の要津余の行業ハ廻り遠く〜て成ゞか〜〜唯観門速ヨ生死を超るの捷径吾こゝを得ると是に於て厚く勤精し續て京師ヨ至て四部の弟子を驚り勤めて貴賤を隔てず普く開悟す又堂に入てハ合掌し跪て一心に念佛して力の竭るを非ハ休す寒冷ゆも汗を流し此行状の至誠を表す出てハ則ち人の為に浄土の法を説てるろ〜の道俗を化して道心を起させ浄土の術を修せ〜むたちまちふくも利益せることあ〜三十余年寝處を設けず眠せず沐浴を除き曽て衣を脱ず般舟行道礼佛方等と以

身の勤とも戒品を護持して毫末も犯さゞ目を開て女人を見ず一切の名利心に念を起さゞ往処争て供養ハ唯鹿食をくゝひて他ヨ施し金銭ハ将て料紙として阿弥陀経を写すること十万余巻画ゞくところの曼荼羅ハ二百余又破壊せし伽藍故き塼塔を修理して私慾せゝ京師の僧尼男女身を高き岸より投て命を捨又ハ深き淵に命をすて或ハ身を焚て供養する者ハ又ハ妻子を捨

阿弥陀経を誦すること十方より三十万遍ゐ又阿弥陀経を念して日に一万五千より十万遍にいる者あり念仏三昧を得て浄土に往生するを弘数をもつべし或ハ善導に問て曰く念佛して實に往生を得るや答て曰汝ゞ念ずる所を遂ぐべしと對へ已て善導ゝ自ら阿弥陀仏を念じゐ斯のごとく一声〳〵則ち一道の光明ありて其口より出十声百声光明又此のごとし善導人ゐ謂て曰く此身厭ふべし諸苦逼迫して情偽変易するもそもそも休息ゐと乃ち住する所の寺の前ある柳の木に登り西ゐ向ひて願くハ佛威神驟りて我を接し観音勢至亦来て我を助け我この念を失ハ驚怖を起さに弥陀の法中に於て以て退墮を生ぜざらしめよと其樹の上より身を投ぐ自ゐ絶す時に京師の士大夫皈信して皆其骨を収め以て葬る高宗皇帝其念仏の口より光明出て又捨報のとき精至かの如きを

知り寺額を賜り光明寺と号すさる程ゐ善導大師ハ師匠道綽より弘願の他力真面目を授り御自身の往生ハ決得しゐ〳〵も観无量壽経とゐハ十六の観法を得るゆゑ法しも名高き天台大師を始として浄影嘉祥とゐふ高僧方こゝゐ自力の眼より観経を見損ゐひ自力修観の経と見ゐる故さぞかし末世の愚痴ある凡生自力に迷ひ折角に弥陀超世の本願ゐ値ちから飯櫃を枕ゐ

て我と餓死するにひとしく空〳〵生死ふ流轉せんことを憐こゝひて十万の諸弘に証據をとひ観経の四帖の疏を作り古今の指定すると大言を吐て末代濁世の衆生往生の道ふ迷いまるゆうれあ〳〵ゆふ御一代の製作へ観无量壽経疏四巻法事讃二巻往生礼讃一巻観念法門等あり就中観経四帖の疏へ第四巻の尾ふ自ふ感じゆふ霊相を記して曰く敬て一切有縁の知識等に白す余已に是生死の凡夫智恵浅短あり然るに仏教幽微にして敢て輙く異解を生ぜず遂に即心を摽し願を結んて霊験を請求て方に心を造すし尽虚空遍法界一切の三宝等と云〳〵南無〳〵皈命〳〵奉る若三世諸佛釈迦仏阿弥陀仏等の大悲の願意ふ適〳〵願くハ夢中に於て願ふ所の如く一切の境界を見ることを得んと仏像の前に於て願を結ひ念仏三万遍して至心発願す即ち當夜ふ於て西方の空中に諸仏显現するを見る又自ふ念仏〳〵ゆふへ一声〳〵ふ

増減すべからず説のまゝ信ぜよと宣ふ観経い釈迦の直説それを阿弥陀如来の御差図ふまつて書る祖ふとゆる三昧発得の善導の御教化にして何ぞもおろかあげ奉るも別して大切ある御教化あり茲ふ善導の在世ふ京師諸列の僧尼士女或い身を高嶺より投ど或い深泉ふ身を沈め或い身を焚て供養せし者百余人に及ぶと以り又長安の屠児（鹿を屠りて産業とする者）京雲藏といふ者ゆり善導大師の人を勧めて念仏まるゆ長安城ふ充るふろく人々肉を断て買ふものさゝふあるゆり程ふ京雲藏瞋て善導を害せんと欲し刀を持て寺にいる師おれを見て西方を指示ゝ即ち浄土の相を現す是を見て忽ち改悔し一心発起して自ら高樓ふ上り念仏するゆ十声その樹より落て終る衆人化仏の天童を引て雲藏ら頂門より出るを見ると斯のごとく捨身する者ゆりといへども末代下化ふ於ては慎しむべきゆあり